幼児の教育　第103巻　第1号　平成16年1月1日（毎月1回発行）昭和23年4月15日第3種郵便物認可　ISSN0289-0836

幼児の教育

家庭・保育所・幼稚園

2004

1

第１０３巻　第１号　日本幼稚園協会

世界に学ぼう！

デンマーク・スウェーデン・フランス・ニュージーランド・カナダ・アメリカに見る子育て環境

子育て支援

最新刊

世界の子育て環境がわかる。

子育て支援に関して、世界には優れた施策や市民活動を展開している国々が存在します。本書では、デンマーク・スウェーデン・フランス・ニュージーランド・カナダ・アメリカの６か国を取り上げて、社会背景とともに育児理念・法制度・保育サービスの種類などを紹介。コミックやコラム、各種データも盛り込み、これからの子育て支援、社会のあり方を考えるうえで役立つ情報満載の一冊です。

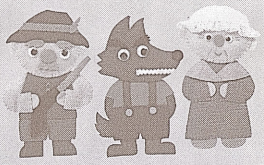
本書の内容（目次より抜粋）

- ●デンマーク……親の参加が義務づけられる運営協議会／普遍主義とノーマライゼーションを理念に
- ●スウェーデン……世界一の女性就業率を支える保育サービス／１歳までは育児に専念
- ●フランス……卓越した家族給付と保育・教育システム／２時間の昼食とふんだんな休暇
- ●ニュージーランド…疑似バウチャー制度による保育支援／伝統的な暮らしぶりと増加する離婚
- ●カナダ……市民活動に支えられる子育て支援／厳しい生活状況と高い女性の就労率
- ●アメリカ……保育行政の遅れを補う民間の体制／保守的な育児観と軽視される保育

汐見稔幸編著　大枝桂子構成・文　Ａ５判　208頁　定価：本体1,800円＋税

簡単手作り

最新刊



中谷真弓の エプロンシアター ベストセレクション

ポケットから生まれる、とっておきの物語！

エプロンシアターの考案者、中谷真弓先生によるベストセレクション。「名作赤ずきんちゃん」「これくらいのおべんとうばこ」「なぞなぞパンやさん」「誕生日おめでとう」を収録。エプロン・人形の作り方の基本、原寸大型紙付きで、すぐできる！

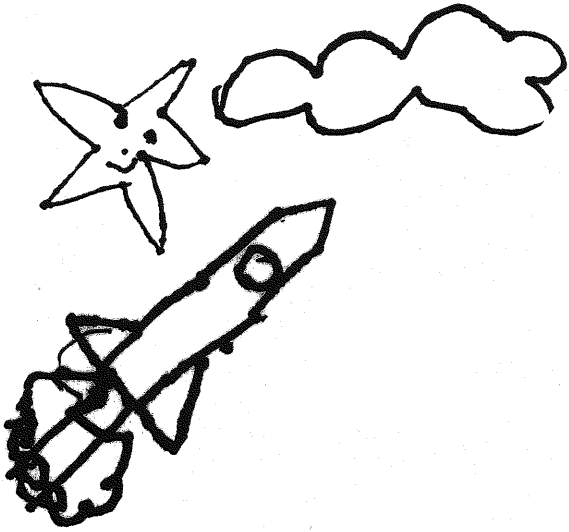
中谷真弓著　ＡＢ判　80頁　本文（カラー40頁／２色40頁）
定価：本体2,200円＋税

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部（03）5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育

第103巻　第1号



幼児の教育　目次

――第一〇三巻　第一号――

巻頭言　威ありて　猛からず……森下はるみ…（4）

日本における幼稚園の成立―幼稚園成立史の研究から―……湯川嘉津美…（8）

ある日……（16）

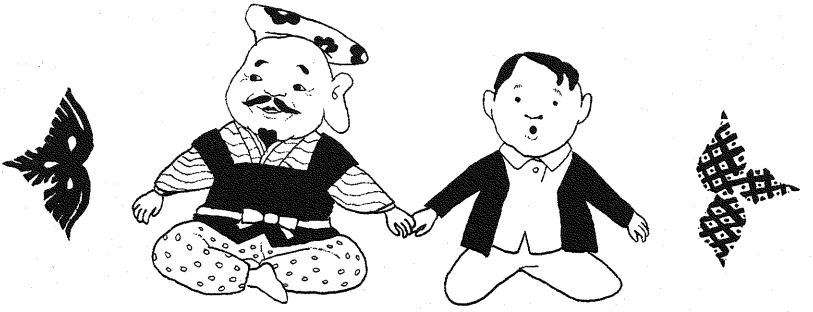
「遊び」雑感　その三　お正月の遊び……吉村真理子…（18）

退職園長による子育て塾(1)　環境と育ち……戎　喜久恵…（25）

平和の種子を育てよう―荘司雅子先生の生涯を思う―……津守　真…（34）

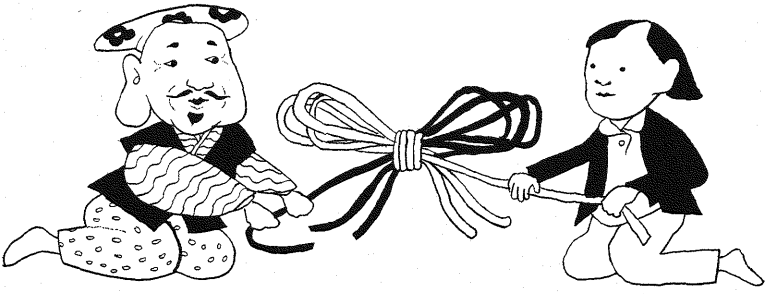
荘司雅子先生葬儀式辞―平和教育の源流―……森澤　一由…（39）

© 2004
日本幼稚園協会



M男との関わりを通して感じたこと ……大久保裕美…（42）
ニューヨークに住む日本のこどもたち(2)
―「NYこどものくに幼稚園」での学び― ……鍋島　恵美…（48）
手づくり活動の楽しさすばらしさ(10)
お正月はおしゃれな箸袋を ……浜本　昌宏…（55）
TO・NI・KARAひろば　その十一 ……嶺村　法子…（56）
子どもの本から　異文化をつなぐ子どもたち ……大沢　啓子…（60）

表紙絵／藤原ヒロコ
扉題字／津守　真
扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット／彌永たたえ「縁起物」
編集委員／田代　和美・高橋　陽子・佐藤　寛子
編集部／仲　明子・河合　聡子



巻頭言

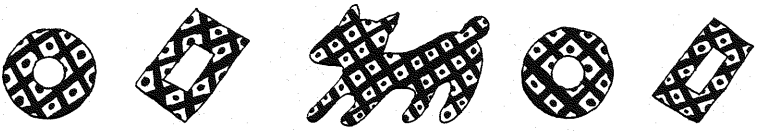
威(い)ありて　猛(たけ)からず

森下　はるみ

M先生のこと

幼児教育の雑誌に〈老い〉はふさわしくないし、ちょっとためらったが、やっぱりM先生のことから話したい。上京のたびに〝今度こそ〟といっていた友人と三人、この七月末、やっとM先生をお訪ねできた。今は、ご自宅でなく郊外の施設だとのこと、ひょっとしたらスタッフ役で入所されたのでは、と一方でわき出る懸念をうちけしながらの往路だった。職員に案内され近づいた痩身白頭の車椅子のお方、一瞬の間があって、やがて水底から浮き出るように現れたその顔は、まぎれもないM先生だった。

丹沢の山並みをバックにした見晴らしのいいホールで、ほとんど一方的にせっかちに



三人がそれぞれ語りかけた。これまでの先生像が、突如、過去のものになってゆくのをふりきろうとでもするかのように……。それに対し先生は終始聞き役で、ときに〝なにもかも忘れました〟とか、〝幼稚園は麹町だった〟とか、か細い声でポツリとつぶやかれるだけ。そして、ふと気がつくと、いつのまにか我々も、先生の醸す一種の静謐な空気の中につつみこまれていた。

人生は、というよりその最終コースは自分では選べない。あの精神貴族みたいな潔癖さの水気がぬけ、その分、気難しいが清明・透徹な老年期をお迎えだろうなどと勝手に予想していた。目の前の姿は、それとは異なる〈老い〉を静かに受け入れている。しかし不思議に、先生らしいある種の品性というか尊厳さだけは変わらない。〝あなたのトラは、威ありて　猛からず〟と、寅年に画いた年賀状に対するH先生からの印象を、めずらしく嬉しそうに語られたことがある。今の先生の〈威〉はもう少しマイルドだ。年とともに身につけたもろもろを、〈その時〉が来たら、一枚ずつ脱ぎすてて、核となるその人らしさに帰ってゆくといわれる。とすれば先生の品性の萌芽は幼年期にちがいないと、その自然体の、〈ことば〉ではない座り姿勢やお茶の飲み方一つ一つから感じとっていた。

伝統芸能のこと

自然体にも二種類ある。一つは生まれたままのもの、いま一つは見習い、繰り返し

て、やがてそれが無意識にできる段階のものである。生まれつきの姿・振る舞いが許容され魅力的なのは、野生動物か、人ならせいぜい乳児期までではなかろうか。野生動物の場合は、その行動すべてが生命保持とかかわるので無駄は許されない。人の場合は、その動作の選択肢が広い分だけ、乳児期を過ぎると、それぞれの社会や文化に受け入れられてきた所作や行動様式の〈原型〉を身につけてゆく。

神楽の「わざ」の伝承について、指導者の言葉をI氏が紹介していた。まず〈かたち〉を覚えることからはじめ、それを続けていくとやがてからだが「あまってくる」段階があり、この段階になってはじめて「あや」のついた〈わざ〉を習得することができるという（生田、「からだがあまる」、比較舞踊学会報、14）。立ち居振る舞いについても、この「あまってくる」身体のあとに、三つ子の魂といえるような原型が、自然体として身につくのではなかろうか。

話は変わるが、「ようこそ　先輩」という好きなテレビ番組がある。先輩であるにわか先生が、まず何でもいいから自由に話すとか、声をだすとか、動くことを求めると、子ども達は例外なくとまどった表情をうかべる。すでに身体が「あまっている」先輩も、それを見てしばしとまどい、そこはさすが、すぐにある〈枠組〉や〈方法〉を提示して番組は無事に進行することが多い。導入されてかなりの年月を経たにも関わらず、いまだに普遍速度の低い「創作舞踊」なども、〝個性を尊重し、自由でのびのび〟という旗印が、逆に不自由さを呼んでいるのではなかろうか。エキスパートといわれる教師

はみな、緩急・緊解自在の箍（たが）をもって子どもに向かい合っているが、このたがはそう簡単には手にはいらない「わざ」そのものだ。

舞台で演じられる伝統芸能は、ふつう演者と観客が分離しているし、演目は観客がよく知っているものからなる。見る側の楽しみは、目新さしさよりは、よく知っている〈すじ〉や〈振り〉を、当日の役者がどう演じるかにある。ところが演じ方を習うとなると、動きのリズム・テンポ、扇のあつかい等々、身体づかいのすべてが、まったく初めての体験になってくる。しかし例外なく、習ってみて、観客としての目も深まったという。

ところで、舞台でのお辞儀、立ち・座り、歩行などの一挙手一投足は、日本文化のなかで、年月をかけて磨かれ精選されてきたもの、原型は日常生活の動作様式に基づくものだ。昨今、やっと伝統芸能の教育への導入が始まろうとしているが、このことは、日常生活の振る舞いの再構成にもつながるのではなかろうか。当方、電車のなかで、品位ある振る舞いの人には、心の中で賛辞をおくったり、一方〈居ぎたなさ〉には、「いじわるばあさん」を実践したりしている。しかし、やがて自分が〈その時〉になったら、M先生とはことなり、「いじわる」の核だけが、梅干の種のように残るのではないかと、ちょっとばかり心配したりしている。

（比較舞踊学会会長）

日本における幼稚園の成立

―幼稚園成立史の研究から―

湯川　嘉津美

日本の幼稚園は、欧米のフレーベル主義幼稚園の導入により出発しましたが、欧米とは異なる社会的背景のもとで、独自の展開をたどりながら成立、定着していきました。今回、日本保育学会保育学文献賞を授与された『日本幼稚園成立史の研究』（風間書房）は、そうした幼稚園の成立過程の実証的な検討を通して、日本における幼稚園の成立とその特質を明らかにしようとしたものです。

本書では、日本における幼稚園の成立時期を一九〇〇年頃とみなし、第Ⅰ部（一・二章）で幼稚園導入以前の幼児の保護と教育をめぐる状況、第Ⅱ部（三・四章）で欧米教育視察を契機とした幼稚園の創設経緯、第Ⅲ部（五・六章）でフレーベル主義幼稚園教育情報の受容、第Ⅳ部（七・八章）で東京女

子師範学校附属幼稚園の成立と各地における幼稚園の成立、第Ⅴ部（九・十章）で文部省の幼稚園政策と幼稚園制度の成立経緯について検討を行いました。以下では、私の幼稚園成立史研究への取り組みの一端を紹介しながら、日本における幼稚園の成立について述べてみたいと思います。

幼稚園との出会い

私がこのテーマに取り組むようになったのは、ちょうど二十年前に近藤真琴著『博覧会見聞録別記子育の巻』（一八七五年）に出会ったことがきっかけです。『子育の巻』は、一八七三（明治六）年のウィーン万国博覧会の報告書の一つで、博覧会場に設けられた子ども館の展示を中心に、各国の子育てや保育施設、幼稚園について紹介したものですが、その内容のおもしろさはもとより、その著者が明治の三大私塾と称された攻玉塾を主宰し、海軍兵学寮の教官も務めた人物であったことに新鮮な驚きを覚えました。その後、ウィーン博からフィラデルフィア博へと検討を進めるうちに、これら万国博覧会を契機として各国でフレーベル主義幼稚園が普及していったこと、そして日本もその例外ではないことを知りました。

日本の幼稚園は、一八七六（明治九）年の東京女子師範学校附属幼稚園の創設にはじまりますが、これを周囲の反対を押し切って設立したのが田中不二麿という人物でした。田中の尽力なしには幼稚園の早期創設はなかったといっても過言ではありません。なぜ、田中がそれほどまでに幼稚園に執着したのか、私はとても不思議に思ったのですが、同時に、そこには何か重要なものがあるのではないかと直感しました。さらに中村正直、関信三らの幼児教育への思いに触れて、一体何が彼らを幼稚園教育に向かわせたのか、彼らは幼稚園の何に期待したのか

を知りたく思い、本格的に調べてみることにしました。

ところが、当時、手がかりとなる先行研究は少なく、やむなく田中や中村、関の動きを中心に、彼らがどこで何を見、何を考えたのか、そしてフレーベル主義の幼稚園教育をいかなるものとして理解したのか、史料の発掘を行いながら検討を進めました。当時の私にとってフレーベルも幼稚園教育も全く未知のものであり、彼らが手にしたであろう外国文献を読みながら、彼らと同じ立場でフレーベルの思想や恩物の理論、幼稚園教育の実際について理解しようと努めましたが、その作業は思いの外、時間を要しました。英語文献はまだしも、一八七〇年代のドイツ語の幼稚園書はひげ文字で書かれており、読むのに骨が折れました。そうした作業を重ねて、ようやく明治初期の外国幼稚園書の受容状況が明らかになり、また、それまで不明とされていた翻訳書や論文の原典も突き止めることができました。田中不二麿についていえば、彼は幼稚園の「就学ノ階梯」としての役割に期待し、「幼稚園ハ智識ノ種子ヲ下スノ田圃」と自ら述べるように、遊びを通した子どもの能力開発に幼稚園の意義を見いだしていました。そうした有用性の認識なしには、幼稚園の創設は困難だったということなのでしょう。

佐藤信淵の保育構想の歴史的意味

フレーベル主義幼稚園の受容に関する研究と並行して、江戸時代の佐藤信淵の「慈育館」と「遊児廠」の構想について、西洋情報の影響を明らかにしようと試みました。先行研究において、西洋情報の影響があるのではないかと指摘されながらも、その情報源の特定がなされていなかったからです。信淵の保育構想には、かつて近世の研究をしていた時にも出会っていたのですが、改めて西洋情報の受容と

いう視点から検討し直してみると、それまで気付かなかった多くのことが見えてきました。

江戸時代は鎖国下とはいえ、漢訳洋書や蘭書、漂流民の見聞記などを通じて、西洋情報は多く流入しており、知識人たちの間ではかなりの西洋情報が蓄積されていました。私は信淵が参考にしたであろうこれら書籍の検討を行い、「慈育館」については、それが西洋の「幼院」情報、とりわけロシアの養育施設情報の受容であることがわかり、さらに信淵と同様の構想を持つものが他にも存在していたことが明らかになりました。信淵においては、そうした養育施設を更に発展させて「遊児廠」という今日の保育所によく似た保育施設までも構想していました。それは明治維新後の子守学校や文部省における簡易幼稚園（貧民幼稚園）奨励策に通じる性格のものであり、私はそこに江戸時代から明治初期に通底する共通の保育課題を見いだすことができると考えました。

各地の幼稚園調査から

東京女子師範学校附属幼稚園の創設後、各地で幼稚園の設立が検討されますが、実際に設立されたものは少なく、一八八一年段階の全国の幼稚園数はわずか七園にとどまっていました。そうしたなかで、大阪府では全国に先駆けて府立幼稚園を設立し、東京女子師範学校附属幼稚園に倣いながらも、大阪府独自の取り組みを行っていました。ここでは大阪府立模範幼稚園の事例を中心に、創設期の幼稚園の一端を紹介したいと思います。

大阪府立模範幼稚園は、一八七九（明治十二）年に府知事渡辺昇の主導のもとに設立されますが、そこでは幼稚園に幼児の教育のみならず、保母養成や

母親教育、貧児の保育が期待されていました。幼稚園が保母の養成を行うというのは、創設期の幼稚園にはよくみられることですが、模範幼稚園ではそうした「保母見習科」とは別に、母親や乳母を対象とした「保育見習科」を設置して、四ヶ月の伝習を終えた母親に「仮証書」を与え、その家庭を「天然ノ幼稚園」にしようと考えていました。幼稚園において幼児教育と母親教育を同時に行うという発想は非常にユニークなものだと思います。

また、群馬県でも県学務課の指導のもとに、「尋常科」と「随意科」の二つの課程をもつ県立幼稚園の設置が計画されました。「随意科」は実現をみなかったようですが、それは「貧困ノ稚児モ随意ニ来集シ遊戯スルヲ得セシム」ために設置するとされており、ここでも貧児の保育の必要性が認識されていたことがわかります。こうしてみてみると、明治十年代の幼稚園認識には幅があり、この時点では幼稚園は幼児の教育だけでなく、母親教育や託児の機能を有する施設としても認識されていたといえるでしょう。

日本における幼稚園の成立とその特質

本書の具体的な内容については割愛し、ここでは研究の成果をもとに、日本における幼稚園の成立とその特質について述べてみようと思います。

第一に、日本の幼稚園は欧米の幼稚園が有していた保護（託児）と教育の二つの機能のうち、保護（託児）の側面を欠いたまま教育の施設として成立しました。

文部省は一八八〇年頃からドイツの「民衆幼稚園」と同種の貧民や労働者子弟のための簡易幼稚園（貧民幼稚園）の設置を奨励し、大阪府や群馬県の幼稚園でも貧児のための保育の必要性が認識されていましたが、小学校の整備が最大の課題であった当

時、保育料無料の貧民幼稚園の設置を計画した市町村はなく、貧民幼稚園の普及は不首尾に終わります。その結果、東京女子師範学校附属幼稚園が唯一の幼稚園のモデルとして採用され、それに倣った各地の幼稚園は就学のための準備教育に力を入れました。

東京女子師範学校附属幼稚園ではフレーベルの考案した教育玩具＝恩物を用いて知育を行い、一八八一（明治十四）年からは保育課目に「読ミ方」と「書キ方」を新たに採用して、読み書き算を教えるようになりました。その背景には、子どもを幼稚園に通わせても遊んで来るばかりで何も教えてくれないという親の強い不満があったといいます。一八八四年の学齢未満幼児の就学禁止を機に（当時、十一万七千人もの幼児が小学校に就学していました）、就学幼児の受け皿として各地に小学校付設の保育科が設置されますが、それは幼稚園よりもさらに読み書き算の比重を高め、恩物を知育の手段として用いる学校的な施設でした。一八九一（明治二十四）年より女子高等師範学校附属幼稚園では幼稚園規則を改正して「読ミ書キ」と「数ヘ方」を削除し、小学校の予備校的性格からの脱却を図りますが、幼稚園の教育施設としての性格自体に変化はみられず、「学校的幼稚園」の克服が課題として残されることになりました。

その後、文部省は一八九九（明治三十二）年公布の「幼稚園保育及設備規程」において、女子高等師範学校附属幼稚園をモデルとする普通幼稚園を「幼稚園」として制度化しました。そこでは貧民幼稚園など簡易な保育施設は、一転して「規程」外の存在として排除の対象とされ、幼稚園は保護（託児）機能を持たない純粋な教育施設として成立することになりました。そして、労働者子弟の保育は、幼稚園とは別種の託児所によって担われるようになり、そ

の後は幼稚園と託児所（保育所）の二元的状況が進んでいくことになります。

第二に、幼稚園は中上流層の子弟を対象とし、そうした社会階層に適合的な幼児教育機関として成立しました。日本の幼稚園は一八七六年に創設されますが、当時は小学校の普及が最重要課題であり、地方では幼稚園まで手が回りませんでした。一八九〇年頃から幼稚園は都市部を中心に、官吏や商業者の支持を得て徐々に普及して行きますが、公立幼稚園でも小学校の授業料の数倍の保育料を徴収する状況は、入園者を一部の富裕層に限定することになりました。幼稚園の維持を保育料収入に頼る私立幼稚園では、公立幼稚園よりも高い保育料を徴収しており、その傾向はさらに強まりました。一九〇〇年の第三次小学校令施行後は、市町村における義務教育費の負担増を背景に、公立幼稚園の設置が抑えられ、代わって私立幼稚園が増設されますが、私立を中心とする幼稚園の普及は、さらに入園者を中上流層に固定化することになり、それは幼稚園を一部の限定された者を対象とするものにとどまらせました。

第三に、幼稚園は学校体系外の教育施設として成立しました。それは一八七九年の「教育令」において、幼稚園を学校とは異なる教育施設として位置づけたことにはじまりますが、一八九九年の「幼稚園保育及設備規程」でもその位置付けに変化はなく、幼稚園は家庭教育を補う学校体系外の教育施設とされました。義務教育の普及・徹底を最大の政策課題としていた文部省にとって、幼稚園の政策的な重要度は低く、「規程」制度後も文部省が幼稚園教育に力を入れることはありませんでした。こうした文部

省の消極姿勢は以後も続き、昭和戦前期を通じて幼稚園は学校体系外の教育施設として認められるにとどまりました。

このようにして日本の幼稚園は一九〇〇年頃に成立し、その基本的性格が形成されましたが、「幼稚園保育及設備規程」において示された、幼稚園は満三歳から就学までの幼児を一日五時間程度、「遊戯」を中心に保育する教育施設であるという幼稚園の基本的枠組みは、以後の制度改変にも関わらず、昭和戦前期を通じて人々の幼稚園観を規定しそれは戦後の幼稚園の在り方にも影響を与えました。

今後の研究課題

私の研究はようやく一九〇〇年までたどり着いたところですが、今後は現在の問題までも視野に入れながら、二十世紀日本の幼稚園とは何であったのかを問うていきたいと思っています。最近、歴史研究は、歴史的事実を述べたに過ぎないもので、現実の保育には役に立たないという声をよく耳にしますが、現在、大きな課題となっている幼保一元化の問題、幼小連携や保育者養成をめぐる問題などは、日本の幼稚園の歴史のなかで形成されてきたものであり、歴史的視点からの検討は、現在の保育の問題を捉える上でも必要不可欠なものだと考えます。

二十世紀に入って日本の幼稚園はいかなる課題のもとにどのような展開をみせたのか、それは世界の幼児教育のなかでどのように位置づけられるのか、引き続き、幼稚園の歴史的検討を行いながら、今後の幼稚園の在り方を考えていくつもりです。

（上智大学）

ある日

撮影・平野　清

「遊び」雑感　その三

お正月の遊び

吉村　真理子

現代人にとって新しい年を迎える実感は薄れたとは言え、日本中の子どもにとってのお正月はそれぞれの地方色を加味して嬉しく楽しいものになっている。その理由の一端はお正月独特の遊びにあるのではなかろうか。今も園内でよく見られるお正月遊びを例にそのことを考えてみたい。

かるた遊び

冬休みがあけて登園した子どもたちは「おめでとう」のあいさつを終えると「新しいカレンダーだ」「今年はさるどしだよ」「うちにもこういうおもちかざってあるよ」と保育室を見回し、用意してあるかるたを見つけると「これしよう」とたち

まち五、六人の輪ができる。年長児はほとんどの子どもが文字を読めるようになっているので、「わたしが読むからね」という読み手の声に耳をすませ取り札の上に素早く目を走らせているが、実際に見ているのは言葉の内容をあらわす絵であり、似通った絵の正否を確認するときだけ文字を見ているようだ。これは文字が記号であることを認識しているからであろう。絵があれば文字の読めない子どももかるた遊びを楽しめるので、三、四歳児が幾人か交ざっていることもある。この子どもたちはお正月休みに家族でかるた遊びを経験しその面白さを知っていたのであろう。回を重ねて三歳のMちゃんが待ち構えているロボットの札が読まれると、年長児たちは誰も手を出さずMちゃんが得意満面で取る様子をにこにこと眺めている。こんな姿からも家庭で大人といっしょに遊んだ様子が想像されて微笑ましい。

かるたの読み札は調子の良い七五調や八五調が多いのですぐに覚えてしまい、同じ絵に別のことばをつける遊びが誕生した。例えば「さくらがさいたらいちねんせい」という札にはさくらの木の下にランドセルを背負った三人の子どもが描かれている。これに「さんにんいっしょにいちねんせい」「さくらのはなはきれいだな」などという言葉をつけて「これでもいいよね」とおもしろがっている。しまいには会話まで「きょうのおやつはなんだろう」「ぼくしってるよドーナッツ」「わたしドーナツだいすきよ」などと指を折って数えながら楽しんでいる。リズミカルな言葉の調子がよほど気に入ったとみえる。

当然次にでてきたのは「かるたをつくってみたい」という要求で、各自が思いついた名文句とそれに見合う絵を描いてみることにした。四七文字揃わなくてもダブっていても現代詩のようであっ

てもそれなりに言葉のおもしろさを満喫した数日間であった。出来上がったかるたで遊ぶ段になると、みんな他の子のものには関心はなくひたすら自分の描いた札を見つめ、順番がきて読まれると満面の笑みを浮かべて得意そうに取っている。結局、みんな自分の札だけ回収したことになり、何度やっても同じでおかしかった。それだけ自分で考えて作った過程が心に強く残っていたのだと思う。

こうした子どもの姿を見ていると、かるた遊びは単に文字を覚えるためなどという単純なものではなく、言葉の根を掘り起こし豊かな言葉の世界へ導く窓口であったことに気付かされた。私も子どもの頃、お正月に家族みんなで百人一首をしていたことを思い出す。字札ばかりで、ことばの意味も全くわからなくても短歌を読む調子の美しさと家族それぞれの取り方や反応のおもしろさにあきることがなかった。まだ小学生の兄たちは大人が上の句で取るのをくやしがり、いくつかの句を覚えて自分の前に並べて待ち構えている。ちょうど子どもが自分のつくった札を他人に取られまいとしたように。そのとき大人はやはりその札を取らないよう配慮していた。子どもへのサービスに「いろはかるた」（注「犬も歩けば棒に当たる」「論より証拠」などのことわざを集めた庶民の処世訓で取り札に絵があり子どもも楽しめた）の相手もよくしてくれた。当時はやはり意味は分からなかったが簡明な言葉はすぐ覚え、「ほら、おなべの絵」（われなべにとじぶた）などとヒントをもらって何枚か取るのが嬉しかった思い出がある。

後になって思えばこれらの遊びは教養の基礎で、百人一首は学生時代に短歌をつくらされたときにことばのリズムや言い回しの参考になったば

かりでなく、文学的なものの見方や感情表現に親しむこともできたように思う。

凧あげ

風のある晴れた日に保育者が庭に出て凧をあげ始めると「ぼく、お父さんと凧あげしたんだよ」「ぼくにも持たせて」と子どもたちが集まってくる。用意していた既製の凧が足りなくなると「わたしたちも凧をつくりたい」という声があがる。初めのうちは簡単にできるビニール凧やハガキ凧を作って遊んでいたが、年長児は壁に飾ってあるような「本物の凧を作りたい」といってくる。そこで和紙や竹ひご、凧糸を出してくると「わーほんものだ」とひとしきり歓声があがる。和紙に絵の具で思い思いの絵を描き始める頃には緊張感が保育室にみなぎってきた。

竹ひごを結び合わせて和紙に貼る段階になると大人の手助けが必要になり、バスの運転手はじめ園長、主任や用務員まで駆り出されるがみんな喜んで手伝っている。バランスをとって糸をつけてもらうと子どもたちは待ち兼ねたように外に飛び出して走りだす。「ねえ、くるくる回ってしまうんだよ」「ぜんぜん上がらないんだけどどうしてだ？」「枝にひっかかって破れちゃった」と次々に訴えてくる子ども相手に助っ人は修繕屋に早変わりで大忙しである。それでもぐんぐん上がる凧

の魅力は抜群で、みんな夢中でいろいろ試している。誰かがしっぽのついた凧の写真を見つけると早速紙を長く切って貼り付け、「長すぎるよ」「そんな短いのじゃだめ」などと大騒ぎ。そのうち風の方向に気が付いた子どもが「こっちから走った方が上がるよ」と知らせている。

昼食の後もすぐに凧を持って外に出て上げ方の工夫に余念がない。上がった凧が増えてくると今度はからまった糸を解きほぐすのに職員はおおわらわ。お迎えの時間になると「ねえ、もってかえっていいでしょ。団地の広場で上げて見るの」「パパに見せるんだ」と大事そうに抱えて帰る子もいた。

次の朝、昨日子どもが帰った後、子どもたちを驚かせようと職員みんなで作った連凧を上げていると登園してきた親子が歓声をあげて眺めている。凧熱は父兄にも感染し、洋凧を作って「今日は仕事休みなんですよ」と上げにきてくださったり、出勤途上に立ち寄って子どもといっしょに凧あげを楽しむ方もあった。町中では凧を上げるスペースも少なくなり、空にいくつも凧が上がっているお正月らしい風景が見られなくなったのはさびしい。

考えてみれば、さきのかるた遊びが文系であるとしたら凧あげは理系の遊びと言うこともできよう。凧の均衡を保ちながら高く上げるには、紙と竹ひごの太さ、重さのバランス、糸をつける角度、リボンのような足をつける効用、風の方向などの力学的知識を必要とするにもかかわらず、試行錯誤を重ねることで（私たち大人も同様であるが）なんとなく体で覚えていくのはすばらしい。

小さい子どもは立ち止まると凧が落ちてしまうので懸命に走る様子がかわいい。冷たい外気の中を走り回るのだからかなりの運動量になるのはた

しかで鼻の頭に汗をかいている。

羽根つき・まりつき・こま回し

同じように運動量の多い遊びといっても全身運動というより巧緻性が求められるものに羽根つきやまりつき、こま回しなどがある。幅の狭い羽子板を落ちてくる羽根に当てるのは難しく、いくつ続けられるかが目標となる。まりつきも同じで不安定なはねかえりにタイミングを合わせるのが難しいが、それだけに記録が伸びるのがうれしくて熱心に練習を重ねている。

こま回し名人と呼ばれる子どもはみんなの尊敬の的になるが、たいてい兄から技術を教わっているようだ。こま回しの場合コーチはほとんど男性職員で、みんなの前であざやかな手つきで回して見せると一斉に拍手が湧き、「すごーい」と一躍人気者になる。気をよくした男性職員はマンツーマンでていねいに紐の巻き方や引き方を手を添えて指導してくれるのでたちまち上達する子が続出している。

手ひねりで回せるこま作りの魅力は、軸の長さと回転板の大きさ、形、取り付ける高さをそれぞれ実験してよく回る条件を発見するおもしろさであろう。それとランダムに彩色した回転板が回ると全く異なる色や模様になることが不思議でいろいろと試して見ている。こう見ていくと、こまや凧を作る過程は科学的な思考過程そのものであり、既製のこまで技術を磨くと同時に手作りごまのおもしろさも見逃せない。

お正月の遊びの特性

園での子どもの様子を見ていると「もういくつ寝るとお正月」の歌の文句をそのままに、かるた、すごろく、凧あげ、追い羽根、まりつき、こま回しなど昔からの遊びは今も魅力を失っていないようである。これらの遊びは内容のおもしろさにもかかわらず、なぜか他の季節にはほとんど見られずお正月限定であることが興味深い。おそらく、昔はお雑煮やお節料理のように「はれ」の日の特選遊びメニューだったのだろう。普段の遊びと違ってお正月の遊びはすべて道具が用いられるのも特徴だ。それも博物館などに展示されている公家の姫君の嫁入り道具に歌留多や双六が入っているのを見れば、もとは宮中で貴族たちの遊びであったことが窺える。当時の文化が遊び道具を通じて伝えられたものの、日頃は玩具が買えなかった貧しい庶民にとって、購入されたかるたや羽子板は日常使うにはもったいなく、お正月にだけ許された特別な遊び道具だったのではなかろうか。それだけに使う喜びもいや増したにちがいない。

また、お正月ばかりは仕事から解放された大人がいっしょに遊んだことも季節限定の要因ではなかったろうか。祖父母、父母、兄姉といっしょに遊べた子どもはどんなに嬉しかったことだろう。同じ遊びをすることでさまざまな文化が伝わってきたのだと思う。

お正月の伝統行事に対しての関心が薄れ、家庭からもそうした風習が消えつつある昨今であるからこそ、幼稚園や保育所では子ども時代の思い出にとびきりすてきなお正月を演出してやりたいと思う。それも凧上げやかるた、こま回しなどを一月の保育内容にとりあげるだけでなく、それぞれの遊びの意味を考え、伝承されてきた文化の豊かさを現代に活かして伝えてやりたいものである。

（元松山東雲短期大学）

退職園長による子育て塾(1)

環境と育ち

戎(えびす)　喜久恵

幼稚園教員経験者が退職という節目で「何かできることをして楽しみたい」とボランティアで始めた子育て塾『にじサタデー』の実践について六回シリーズで報告したいと思います。

『にじサタデー』の概要

1　名称

実施場所がかつての国分尼寺跡の石井町尼寺であること、実施日が土曜日であること、そしてさまざまな個性が集まって虹を創ろうとの願いを込めて名付けました。三年目の現在では、保護者は『にじサタ』と短く呼びあい、子どもたちは『にじようちえん』『もう一つのようちえん』と自分の通っている幼稚園と区別をしたり、『タケノコ掘りようちえん』『そうめん流しようちえん』など印象深かった出来事名をつけて呼んでいます。

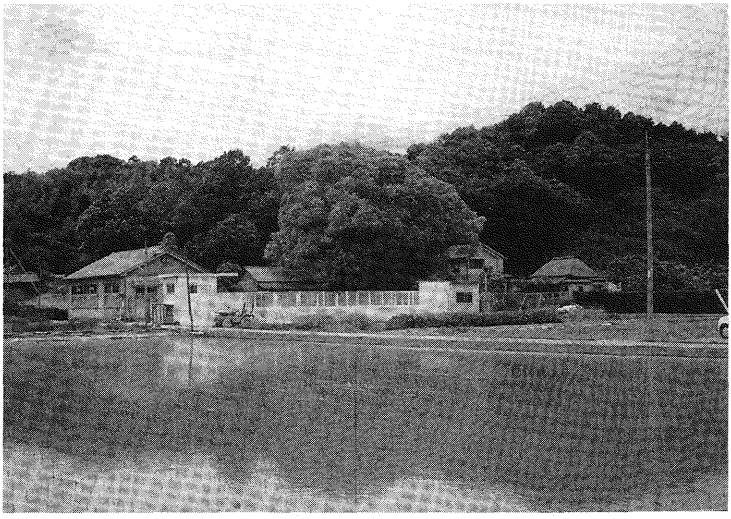
呼び方はさまざまですがそれぞれの思いが伝わりあっています。

2　目的と方法

子育てを請け負うのではなく、今までの保育経験を生かして参加者の家庭での子育てが少しでも潤い創造的になるように、「子どもがいるからこんなことが出来る」「子どもとするから楽しい」ことを提案し、「子どもといる時間を楽しむ保育」を伝えていきたいと考えています。そこで、すでに在る環境を積極的に活用し、少し工夫することで自分の子育てに生かしていく生活体験を共に楽しむようにしています。その中で子どものすばらしさを共感していきたいと考えています。

3　実施場所

石井町立石井小学校尼寺分校を毎月第四土曜日



▲自然に包まれた尼寺分校

に借用しています。徳島市より約八キロメートルの郊外にある小さな小学校で周辺には田畑、小川、原っぱがあり、校庭には大樹や花壇、裏山には地域の方が所有する竹藪やドングリがなるクヌギの林もあり自然に恵まれた場所にあります。地域に子どもが少なくなり、三年前から休校になっています。

4　参加者

○歳から三歳の子どもとその保護者、中でも家庭で初めての子育てをしている方たちに子育ての情報提供や悩み相談が出来たらとスタートしましたが、卒業がない上に兄弟が加わり、三年目を迎えた現在では生後八ヶ月から小学校五年生まで三十八名の登録児があります。

また、スタッフも退職園長四名で始めましたが現役の教員や元教員、幼稚園教員を目指している学生の参加があり、それぞれの立場で学びあっています。先輩ママの教育力も発揮されています。

5　参加費

子ども一人につき年間一〇〇〇円（そのうち五〇〇円は保険料、残りがおやつの材料費）です。初回は体験入学で、二度目の参加時に納めていただきます。

6　実施日とおよその日課

毎月第四土曜日

校内で過ごす時のおよその目標を表1のように決めていますが、子どもの好きな散歩やおむすびを持ってのお出かけなどその日のお天気や活動によって常に変更されています。

また、その日の天候や参加してくる子どもたちの様子から生活の場面を創造しながら参加者と一

◀表1

9：00～ 9：30	生活の場を今日の活動を想像しつつ整える。
9：30～11：00	子どもと一緒に過ごす（おやつ作りもする）。
11：00～11：30	おやつを食べながら親・子・スタッフで歓談する。
11：30～12：30	おやつの場の片づけや続きの活動をする。
	今日の保育や子どもの様子について話し合う。
	生活の場を元のように整える。

緒に遊び空間を準備したり整えたりして子どもとの生活を創り出すことや、この場所でさまざまな経験が出来たことに感謝しつつ元の状況にして返すことも大切にしています。

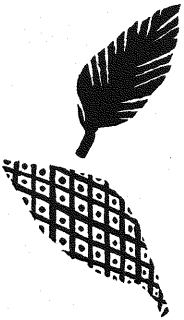
7　その日の生活のなかみ

子どもたちの創り出す遊びはスタッフが提供することは少ないのです。その日になってみないとどんなメンバーが揃うかわからないからです。低年齢児が多く、しかも少人数の時はゆったり穏やかな時間が流れます。散歩に出ても手をつないで歩くことが楽しかったり、水の流れをじっとのぞき込んだり、草原に座って草をむしったり投げたり、小さな虫に出会ったりもします。幼稚園児や小学生が数人揃うと活発な動きが生まれます。小さな子どもたちもそれにつられて動くことになります。その日それぞれの子どもたちが始めたことやしたいことを大切にしているといつの間にか全体の流れが生まれてきます。また、その日になって突如として予期せぬことが飛び込んでくるものもあります。近所の方から「稲苗をたてるのに畑の大根がじゃまになるので抜いて持ってきましょうか。もらってくれますか」と声をかけられ「じゃまにならなければ親子で大根ぬかせてください」と急ぎ大根畑へ、ということもあります。

「せっかくの」「またとない」チャンスは取り入れていきます。また、月に一度の保育ですからタケノコ掘りなどその季節でないと体験できないものや、お月見団子、お餅つき、草餅、焼き芋などのおやつ作りに季節の恵みを取り込んだ生活を織り込んでいくようにしています。

田んぼサッカー

分校の横の小さな小川（側溝ほどの幅ですがきれいな谷水が流れている）とやっと乗用車が通れる幅の道路を挟んで空き地がある。元は田んぼであるがつい最近国分尼寺跡の発掘が部分的に行われていて決して広くない。しかし、分校の校庭はドッジボールのコートがやっと一個とれるほどの空間しかない。それでも先月はよちよち歩きの弟妹に気を遣いながら幼稚園児・小学生がボールを蹴っていた。今月は存分にボールを蹴ることが出来る空間として空き地を選んだようである。空間は確保できたが地面が平らでなく、まるでラグビーボールのように思いもかけない方向にバウンドする。でこぼこに足を取られて転んでしまう。はじめは不平を言っていた子どもたちも自分の失敗をでこぼこ地面のせいにしたり、地面のせいだと慰めてもらっているうちに今度こそはと要領をつかみうまくなっていく。いつの間にか安全な校庭を提供してもらった弟妹たちも遠巻きに観戦している。いつの日か自分もと思っているかどうかはわからないけれど、ギャラリーに囲まれ田んぼサッカーはますます盛り上がっている。



▲田んぼサッカー

不安定を楽しむ？

サッカーの傍らで、えいきくん（二歳二ヶ月）は史跡発掘で出来た粘土質のごろ土の山を二、三歩登っては転び歓声を上げている。けがをしないかと近づいてみる。土のかたまりの上に上がると足下の土のかたまりが壊れて体のバランスが崩れ転んでしまう。しりもちをついたり前につんのめったりする。母親と私は止めようと手を差し出すがその手を振り払って繰り返す。石のような形の土がえいきくんの体重で壊れることが面白いのか、足下がぐらつき倒れることが面白いのか、倒れても元気に起きあがれることが面白いのか、衣服は泥だらけになっている。母親は「このごろ洗濯物が増えました。元気に遊べた証拠です」と笑っている。えいきくんは、十一月のお散歩では同行のみんなに迷惑をかけないように抱っこして

急ごうとした祖母を振り払ってお宮さんの石段を一段一段時間をかけて自分の足で登り切り、充実した笑顔を見せていた。「家の中では私に付きまわってばかりなのです。ここに来ると笑顔が見られてうれしい。男の子は外で体を動かさないとだめなんですね」と母親。自然は子どもたち一人一人にその子どもの必要とする経験を提供してくれている。子どもたちは実に的確に自分の生活にその環境を取り込んでいる。えいきくんの笑顔をみながら納得する二人であった。

この日のことで「レインボー通信」に寄せられた参加者の声を紹介します。

この通信は保護者の手によって生まれたものです。はじめはお互いに撮った写真を交換していましたが、それが好評で「それなら、いっそのこと、楽しい写真を貼り付けて通信を作って、内輪で楽しんじゃえ」とパソコンの得意なakiパパが参加者から送られてきたメールを編集して参加者に配っています。

にじサタデーのたんぼサッカーが楽しかった。たんぼサッカーの動きにくいところが、とくにおもしろかった。いっぱい動いた後のやきいもは、とってもおいしかった。（小学三年生　Y）

「たんぼサッカー」でおもうこと

子どもたちとたんぼサッカーをしました。最初は、「でこぼこでボールがけりにくい」「へんなの」なんて言っていた子ども達でした。ところが、しばらくする間に、でこぼこがつくり出すボールの動きに慣れ、自分の足に巧みにボールを添わせていました。また、「なかなかボールがこない」と不平を言っていたゴールキーパーの子

レインボー通信

2003. 3. 22発行

2月のにじサタ、たのしかったですねえ。おいしかったですねえ。太くてあまい大根やほうれん草、ちんげんさいや人参、そして感動の体験や大奮闘の自慢話が、しばらくの間我が家の食卓を飾りました。平尾のおじさまの畑に入れて頂いた子どもたち（実はママたちが一番熱狂していましたが・・・）の真剣な顔、驚いた顔、満足した顔がとってもまぶしかったですね。感謝感謝です。

春の匂いをすいこんで「いさ!」　　ありがとうございました

よいしょっ

やったぞ!　どうです!

「うんとこしょ　どっこうしょ」土から引っこ抜くと、ああ　感動。「おっきい」「おもい」「つちのなかのところと、ここ　いろがちがう」「葉っぱちくちく」

▲保護者の手によって生まれたレインボー通信

は、いつの間にか、ゴールを引っぱってきて、距離を縮めていました。ゲームはエキサイティングになりました。子どもは本当にすごいと思います。自分のおかれた状況に埋もれず、よい状況をつくり出していきます。私たちもそうありたいと思います。よい関係、環境、よりよい状況をつくり出し、子育てに奮闘する仲間達と共にある生活を楽しみたいと願います。（akiパパ）

自然にチャレンジする。それは、今、日常生活の中でなかなか経験することのできないことのように思います。しかし、それがここではできる喜びを親子共々感じています。

ドングリを求め、山の中をいけるところまでいってみる。田んぼサッカーでは、でこぼこグラウンドで転びながら、自然の土の上で思いっきり体を動かし、うまく走れるコツをつかむ。伸び伸びと楽しそうにサッカーをする子どもたちの姿。生き生きとし、目は輝き、あふれる笑顔に感謝の気持ちでいっぱいになりました。自然に感謝。にじサタデーに感謝です。（K．B）

今回は、『にじサタデー』の始まりと冬の生活の一部を事例と写真で見ていただきました。たまたま自然環境に恵まれた場所が得られたので、地域を知れば知るほどに次回は散歩をしたい、見つけた山芋を掘りたいと子どもたちの夢がふくらんで地域全体が保育（生活）の場になってきています。子どもが育つ環境を提供して頂ける地域の方々やスタッフに感謝です。三年目を迎えた今、その気になれば子どもの集う場所は子育て塾になることを実感しています。

（神戸女子大学）

平和の種子を育てよう

―荘司雅子先生の生涯を思う―

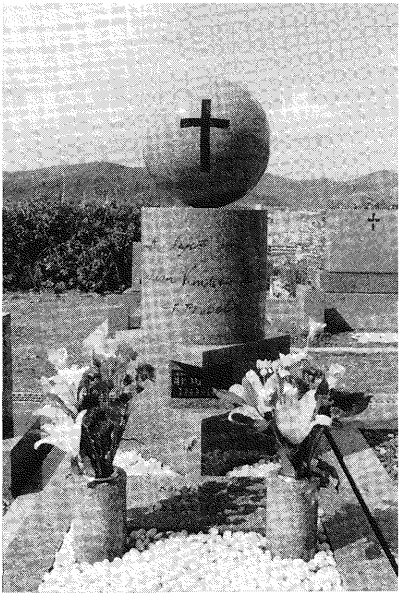
津守　真

二〇〇三年六月、私は下関梅光学院開学百三十二周年記念式典に参列し、帰途、広島流川（ながれがわ）教会の聖日礼拝に出席した後、荘司雅子先生のお墓に立ち寄った。急な坂を上った小高い丘の頂上に、広島のキリスト教会合同墓地があり、そこの流川教会の墓地に、フレーベルと同じ、立方体、円筒、球を組み合わせた墓石が立っていた。フレーベルの愛誦句『さあ、わたしたちの子どもらに生きようではないか』が和独両文で刻まれていた。

私が今回広島を訪ねたのは、先生のご葬儀がなされた流川教会の森澤一由牧師の告別の辞が先生の生涯の真実に触れたものであることを、葬儀に出席した友人たちから聞いていたからである。

フレーベル教育学

私と荘司先生との直接のつながりは、先生の晩年、ＯＭＥＰを通してであるが、遥か以前からフレーベル研究の大先輩として仰ぎ見ていた。私が学生の頃読んだ数少ない幼児教育の書物の中に、荘司雅子著『フレーベルの教育学』という題名の書物があった。戦時中に大八州出版株式会社から出版された黄ばんだ紙表紙にザラ紙印刷の本だった。その序文に荘司先生自ら次のように書かれている。「思えば私（荘司雅子）がフレーベル研究を畢生の仕事として胸深く決意するに至った動機ともいうべきものは決して少なくない。間もなく高等女学校の一教師として自己の貧しい姿を教壇にさらさなければならないという女高師三年時代、私が何かしら久遠な世界を想望してそれに憧れる悩みは決して浅いものではなかった。しかも仰いで久遠なものを高く彼方に求めるよりはまず自らを見つめよ！この声なき声がついに私をして大学入学を志願させたのである。」久遠なものを高く仰ぎ見ておられるような先生の眼に私は何度も出会ったように思う。その最初は、昭和二十四年、第二回日本保育学会大会がお茶の水女子大学附属



◀荘司雅子先生の墓石は立方体、円筒、球を組み合わせている

幼稚園遊戯室で開かれたときである。壇上に仰ぎ見た先生の美しい姿は、あれから五十数年にわたって、毎年日本保育学会大会の度に変わることはなかった。

荘司先生は、若き日について何度も語っておられる。「では何が私（荘司雅子）をフレーベルに惹き付けさせたのでしょうか。フレーベルのどこに私がほれ込んだのでしょうか。まず第一にあげられることは、フレーベルの世界観と人間観には夢とドイツ・ロマンティークが一貫して流れていることであります。――浪漫的人間は、自然と精神とを一体に見ようとします。だから現実を現実のままで満足するのでなく、現実のうちに秘められているもの、また超現実的なものを求めようとするものです。そしてこのような性格が人間をして新しい文化を創造させるのです」荘司雅子著『フレーベル「人間教育」入門』（明治図書　一九七三）と。先生の一生がこの一文にこめられていると言ってもよいと思う。先生は晩年に至るにまで同じことを語られる。

世界各地で出会ったそのときどきの思いを集めたエッセイ集『学問の道草』（玉川大学出版部　一九九三）も若き日のことから始まる。「フレーベル研究一筋に無我夢中で歩むこと十数年、足の裏に豆ができたのに気がついた。見たらコンクリートの道の上を歩いていた。思わず横の草花が生えている土の上を歩いてみた。すると土の冷たさと草花の柔らかさで私の胸の奥に潜んでいた情熱がいっせいに燃え出した。」

人間は本来浪漫的な性格をもっていてたえず永遠なものを思慕し追求している存在であるというのは先生の持論である。子ども自己活動もそこから発するのであり、それはかならず創造的なものであるという先生の幼児教育論に私は共鳴する。

このようにして若き日にフレーベル研究を志し、それを完成された先生ご自身の生涯は実に創造的なものであった。

平和教育

一九八三年、私が大学を辞して日本保育学会の理事会で先生にお会いしたとき、先生はぶっきらぼうに、「あんた、いくつ?」と尋ねられ、「神様の命令だと思うんだね」と言われた。ずばりと言い当てられたところから、私の中に荘司雅子先生との新しい出会いがはじまった。一週間後に、突然電話を頂き、ＯＭＥＰ日本委員会の仕事を担当してくれないかとのことだった。私は一晩考えた後にお引き受けした。荘司先生からのお誘いが重く響いていた。ＯＭＥＰ日本委員会の会合は先生が上京のとき宿泊しておられた六本木の国際文化会館で開くのが常だった。世界各地で開催される世界理事会の報告など、世界の幼児教育の様子を交えて、皆で語り合ったのも、先生との楽しい思い出である。当時の世界総裁マデリン・グタールが一九八五年にユネスコから“Seeds For Peace”『平和の種子―国際理解と平和教育における就学前教育の役割』を出版した。それを日本語に翻訳するときには先生が進んで序文を執筆して下さった。その冒頭に先生は次のように書かれた。

「世界の平和、人類の幸福は世界中の人びとの絶えざる願いでありながら、地球のあちらこちらで戦争や紛争が絶えないのはなぜであろうか。とくに核兵器の出現によって人類は常にその生存をおびやかされている。いまや世界の人々は如何にすれば戦争をさけ、平和を実現することができるかを考えざるを得なくなってきた。」

それから二十年を経た今日、世界は逆転したのではないかと思わせる時代を迎えている。あのと

きすでに先生は、「デモクラシーにしても国際連合にしても、科学技術の教育にしても、また宗教にしても、その出発や動機はいずれも人間尊重や人類愛や同胞愛でありながら、その終局においてはつねにその反対の利己主義におちいってきたからである」と述べ、「問題はここにあるのではないであろうか。」とはっきりと指摘しておられる（『国際理解の教育とヒューマニズム　ヒューマニズムの教育思想』第6章　刀江書院　昭和四十三年）。

広島平和文センターから、『親と子のための平和教育』という小冊子を刊行されたのは一九八一年である。「親のみなさま！ヒロシマは世界中の人々にとって、もはや単なる地名ではなくて平和のシンボルです。」からはじまるこの小冊子は、戦争は人の心からはじまるのだから人間の心の中に平和の砦を築かなければならないと、原爆の悲惨な体験とともに先生は訴えつづけられた。一九九五年に横浜でＯＭＥＰ世界大会を開催することになったとき、それを読んだ北欧の参加者の方が、心がいっぱいになって昨夜は眠れなかったと語った。先生はすでに足が弱られて外出が困難で、世界大会当日には名誉会員の授与式にも出席されなかった。私が賞状をお届するのが遅れているうち、先生から「早く届けてくれませんか」と、いつもに似ず弱々しい声で催促の電話を頂いてしまった。それを思う度に私は申し訳ない思いでいっぱいである。

荘司雅子先生は一九九八年二月二十二日に亡くなった。

先生が台湾のご出身ということは以前から聞いていたが、葬儀のときになされた広島流川教会牧師森澤一由牧師の告別の辞が真情をこめてそのことにふれていることを出席した友人から聞いた。

今回私は、先生の平和への深い理解がここに源をもつものであることを知って、一層、荘司雅子先生への敬慕の念を深くした。先生ご自身が、異文化のなかにあって、愛と和解への内心の戦いをしておられたからこそと知った。

私はあらためて、荘司雅子先生が二十世紀の幼児教育を背負って生きられたことを意義深く思う。

荘司雅子先生葬儀式辞

―平和教育の源流―

森澤　一由

荘司雅子先生は、一九〇九年、当時日本の統治下にあった台湾の嘉義で尚家の十人きょうだいの四女としてお生まれになりました。ご尊父は人々から尊敬されていた儒学の教授でした。幼児期に厳しい躾と教育を受けられました。当時台湾人と呼ばれた人たちが日本で高等教育を受けるのに

は、台湾総督府の特別試験に合格して奨学金を得ることが必要でした。荘司先生はその難関と言われた試験に合格し、教育者として歩む決意をして、当時の奈良女子高等師範学校に入学されました。その時代に特に注目すべきことは、先生が奈良ホーリネスキリスト教会で洗礼をお受けになったことです。この教会は、戦時下厳しく迫害され、数名の牧師、信徒はそのために獄中で命を失っています。総督府の奨学金を受けた者は、卒業後、教師となることを義務づけられていましたので、先生は台湾に帰って義務を終えられた後、広島文理科大学に進み、更に学者としての道を歩まれました。広島で原爆に遭っておられます。先生の学者としての業績は、広く知られています。私たちはそれをいくら賞賛しても賞賛し尽くし得るものではありません。当時日本の大学で、文科系で博士号を得るのは大変なことで、その上、女性蔑視の時代に女性として最初の博士号を得るのは想像を絶する大変なことでした。更に覚えたいことは、先生が日本統治下の、台湾出身であったことです。当時、韓国、朝鮮、満州と共に、台湾人は日本の第二国民とみなされるという屈辱的な差別のもとにありました。それを有り難いと思えと言って押し付けられたのです。しかし、先生はキリスト教信仰によって、そのような理不尽も与えられた十字架として背負って歩まれました。荘司先生は、天に宝を積むようにと神様からの声に従って、学者として歩まれました。父上の儒家思想では、「徳をもって恨みに報いよ」と教えられていますが、キリスト教では、「汝の敵を愛せよ」といわれています。「天の父が完全なように、あなたがたも完全であれ」といわれています。父の教えとこの聖書の言葉を信じて生きられました。荘司先生は、日本から受けた屈辱的な痛みから逃

げたのではない。忘れたのではない。荷ない、忍耐しながら、見えるものにではなく見えないものに目を注ぎ、それについては口に出して言われなかったのです。だからといって、隠したのではありません。言わない方を徳とされたのです。損得の得ではない。人徳の徳です。先生は、人生の三分の一を強制的に日本人として生きさせられ、残りの三分の二を自発的、積極的に日本人として生きられました。最高の日本人として生き、徳をもって報いられました。戦争中にクリスチャンを迫害した軍に対して、フレーベルの平和教育をもって対抗し、平和を愛する日本人の心を信じ、日本人となって実際に生きられました。だれよりも日本人として、日本人らしく生きられました。日本の女性、教師、学者として生き通されました。私共は今、そのような荘司先生の信仰的な、また、学問をもって探究された真理を身をもって具現されたご生涯を今一度覚え、感謝して先生を天にお送りいたしましょう。私共もいつか天に行かなくてはなりません。そのとき荘司先生は天にあって私共を待っておられます。荘司先生は、例の調子で、質問されるでしょう。「あなた、どう生きてきたの？」と。その時先生に喜んで頂けるような、お返事が出来るような歩みをしてまいりましょう。そのように心から願いつつ先生を、天にお送りしましょう。

（広島流川教会牧師）

M男との関わりを通して感じたこと

大久保　裕美

M男は年中組二学期に私の担任するクラスに途中入園してきた。

乗物が好きなM男は、電車の絵を描いたり、ブロックで電車や車を作ったりする遊びを好んでいた。同時期に途中入園したS男は自ら友達との関係をもつことで安定していったようだが、M男は一人黙々と自分の好きな遊びに取り組むことが多かった。私はM男に対して、初めての環境ということもあり、まずは自分の好きな遊びを見つけ、安心できる場を持って欲しいと願い、関わっていた。

しかし、二学期後半になっても何となく不安そうな様子のM男に私もだんだん焦り始めた。やはり、友だちとの関係も安心して生活できる要因の

一つになるのではないかと考え、M男の好きな遊びを通して友だちとの関わりが持てるようなものはないか、とビニールテープを使っての線路作りを提案してみることにした。他にも遊びに打ち込めない様子の人たちがおり、気にかかっていたので、何かが変わるきっかけになれば……という思いもあった。

保育室の床（フローリング）にビニールテープを貼って線路を作ることを私が始めると、何人かの電車好きな人たちが集まってきて、盛り上がり始めた。私はM男も誘い、共に楽しんだ。この遊び自体は一時的にしか盛り上がらなかったが、やがてM男は自分の好きな電車の絵を描いたりブロックで電車や車を作ったりする遊びに加えて、電車好きな仲間と共にホールの大型積み木で電車を作るなど少しずつ世界を広げていっているようであった。

年中組三学期になると、今度は子ども達からビニールテープの線路作りが始まった。M男もその一員であった。二学期にはただビニールテープを貼ることを楽しんでいた遊びが、今回は一人一人がイメージを持ち、線路だけでなく、道路や横断歩道、郵便局など床の上を街のようにつくっていった。私の中にはビニールテープを床に貼って街をつくる、という発想がなく（私の発想は〝線路をつくる〟というところで終わっていた）、改めて子ども達のイメージの豊かさを感じた。

M男は、周りの友だちが他の遊びに行ってしまっても、一日中道路を作り続けていた。そんな様子を見ていたクラスの人たちから「M男くんすごい！　おもしろい！」と言われ、M男は自分に自信を持つきっかけを得たようであった。そして、M男は今まで以上に自分の好きな遊びに夢中で取り組むようになっていった。

M男は、線路作りを継続しながら、空き箱を使って車を作る遊びにも夢中になった。ペットボトルの蓋で作ったタイヤを空き箱につけて走らせる。この車作りも以前、私がM男に作って見せたことがあり、M男はそれを覚えていて作り始めたのではないかと思われる。初めは保育室の中で走らせていたが、次第にスロープ（園舎の一階と二階をつないでいる）でも走らせるようになった。スロープは傾斜があるため、スピードが出るが、真っ直ぐ走らないと途中で止まってしまう。M男は「どうして真っ直ぐ走らないのだろう……」と試行錯誤を始めた。私はM男に「自分で気づく体験をして欲しい」と考えながらも内心では「気づけなかったらどうしよう、いつ頃私が関わっていくのがいいのだろう」と悩みながら、しばらく見守ってみることにした。するとM男はあるとき「タイヤが真っ直ぐについていないからだ！」と言い、自ら気づくことができた。このときのM男の喜び、感動はとても大きなものであり、それを共に感じられた私にとっても大きな喜び、感動であった。

年長になり、保育室が変わってもビニールテープの線路作り、空き箱の車作りは継続して楽しんでいた。

年長二学期のある日、M男は「前のタイヤが動けばカーブできるんだよなあ……」と、方向転換

できる車を作り始めた。M男は、どうやって前のタイヤを可動にするのか悩んでいた。ものを作ることが好きなM男であるし、以前にもだいぶ試行錯誤をした経験もあったので、今回は、私は安心してM男を悩ませることができた。その日は前輪を可動にできるアイデアが浮かばず、降園となってしまった。

そして翌日、M男は朝一番に「昨日、お母さんに相談したんだ」と車作りを再開した。母親にアイディアをもらったようで、どうにか自分のイメージを形にすることができた。家に帰ってもこの車のことを考えていたことにM男の思い入れの強さを感じた。

三学期になり、クラスでは劇遊びが盛り上がりをみせた。二月に〝お楽しみ会〟と称して子どもと保護者が共に楽しむ日があり、年長組ではそれまで楽しんできていた「ジャックと豆の木をみんなで演じよう」ということになった。M男は、入園当初からクラス全体が参加するような活動（例えば、降園前に「椅子取りゲームをしよう」など）には参加したがらなかった。この劇遊びも同様で、保育者が少しでも興味を持って欲しいと願い、誘っても「見てる」と言い、積極的に参加する様子はなかった。私は「そういう参加の仕方もある。いつかM男の気持ちが動く日が来るかもしれない。」とM男の思いや姿を認め、受け止めようと考えた。しかし一方では、実は「どうにかして少しでも興味を持ってくれないかな、参加してくれないかな」と思ってもいた。

三学期のある日、一、二学期と同様にクラスでジャックと豆の木の劇遊びを始めると、M男はジャックになったり、大男になったり……とごく自然に劇遊びに参加していた。私は誰よりもストーリーの流れを理解し、いろいろな役にチャレ

ンジするM男の姿をみて、M男は今までこの劇遊びを見ているだけだったのではなく、体は動いていなくても気持ちはしっかり参加していたのだ、友だちの姿を見ていたのだと気づいた。そんなM男を理解できずに何度もしつこく誘ったことを反省した。

そして、M男は〝お楽しみ会〟の役を決める際に、自ら「ジャックをやりたい」と立候補した。クラスの雰囲気がお楽しみ会に向けて盛り上がる中、M男もお楽しみ会に向けて積極的に動き出すのかと思いきや……自分の好きな空き箱の車作りに打ち込みつつ、周りの様子を感じ、お楽しみ会へ向けても意欲的に取り組みはじめた。私は、このようなM男の姿に自分の好きな遊びも大切、クラスの活動も大切と感じ考えているのだな、と思い、嬉しくなった。

私は、M男との約一年半を振り返ってみて、そのときは気づかなかった、あるいは気づけなかった様々なことがみえてきた。

M男は自分の興味から取り組んだ様々な遊びを通して試行錯誤する体験を積み重ねてきたように思う。ビニールテープの線路作りや空き箱の車作りでは、私が提案したときと自ら取り組み始めたときとでは、M男の様子は全く違っていた。私が提案しなければ、M男はこの遊びに出会えなかったかもしれないが、私が提案したときからしばらく時間をおいて、再度自分で選んだ遊びだからこそ、そこにはM男の思いが多く込められており、イメージが膨らみやすく、不思議に思ったり、試行錯誤したり……という体験がより深くできたのではないかと思う。そしてこのような体験を積み重ねてきたことが、今になって確実に、M男の力になっているのではないかと思う。

M男の友だちとの関わり方の変化も今になって気づけたことの一つである。

年中三学期に仲間とビニールテープの線路を作っているときは、友だちの側で友だちの存在を感じながらも、自分一人の世界で楽しんでいたように思う。偶然友だちと繋がったり、友だちの作っている姿をみたりすることを楽しんでいたようである。

年長二学期になり、方向転換できる車を作っていたM男は、言葉で自分のイメージを友だちに伝えていた。更にその後、初雪の日に除雪車を友だちと二人で作り始めた際には、お互いのイメージを伝え合いながら、お互いのいいところを真似しあう姿もみられた。そして、三学期には集団での劇遊びに意欲的に取り組むM男の姿があった。

こうみると、M男の気持ちや周りの環境への興味、思いなどが、初めは自分の内に向いていて、次第に周りの人や環境にも向いていく様子がみえてくる。

また、自分の好きな遊びにじっくりと取り組むことを通して様々な体験をしてきたことが、お楽しみ会のような大きな活動の中でも活き活きと動くM男の姿に繋がっていったのではないだろうか。

毎日の保育に追われていると、なかなか長期に渡っての一人一人の育ちや自分の関わり、認識の偏りを振り返る時間がないのが現実だが、こうして一人に焦点を当て、長期に渡って振り返ってみると、様々なことが見えてきて、自分の保育を深めていくきっかけになったと思う。またM男について言うならば、M男が幼稚園で体験してきたことはこんなにも意味深いものだったのかと改めて感じ、日々の子どもたちの遊びについても考えることができた。

（駒場幼稚園）

ニューヨークに住む日本のこどもたち(2)

―「NYこどものくに幼稚園」での学び―

鍋島　恵美

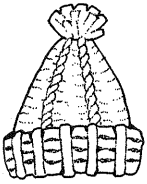
さてさて、再び「魔女学校修行の始まり」です。再びというのは、実は「魔女学校修行　春の巻」と称して九月号に春に訪れたNYこどものくに幼稚園の様子を述べています。今回の出発を前にスケジュール調整をするのにNYこどものくに幼稚園園長のH先生から、次のようなメールが届きました。

『九月は入園式、十月はハロウィーン、その前にパンプキン狩り、楽しいこどもたちのお祭りです。十一月はサンクスギビング、食べられることに感謝する行事です。野菜月間と称し、いろんな野菜や果物を家族から持ってきていただき、食べたり遊んだりします。十二月はクリスマス会、人に何をしてあげられるか考えるときです。これを読んで期日を決めて下さい。ハロウィーンには、こども先生達も変装

して楽しみます。鍋島さんも何にするか考えてきてください。』

「ハロウィーン」「パンプキン狩り」「サンクスギビング」「人に何をしてあげられるか考えるときのクリスマス会」と、日本の保育にない文化のにおいのする言葉が舞い込んできました。ハロウィーンの変装「どんなふうにして楽しむんだろう……何になるか考えて……どうしようか」と、興味と不安を抱いて再び十月下旬から十二月の初旬までの予定で出発することにしました。

そこで、アメリカ文化の行事の中で生活するこどもとおとなの有り様と、現地校で学びだしたこどものくに幼稚園の卒園生の生活ぶりについて感じたこと考えたことについて次回と二回シリーズで述べようと思います。



魔女学校　修行　晩秋の巻

二〇〇二年十月二十日

ＮＹ　ＪＦＫ空港に到着

宿泊先は、車の免許のない私が生活できるに最適だった前回と同じ所にしました。同じ所へ再び訪れるのは安心感があるものです。今回の部屋は、広い通りを挟んで住宅地を眺める方角にあり、窓の外へ目をやると視界が開け木々のこんもりとした情景がとても印象的です。その木々も紅葉の時を迎えており、赤、黄、緑と色とりどりで美しいものです。日本の我が家は、市街地で家の窓を開ければ、狭い道路を挟んですぐに向かいの家の窓が目に飛び込んできます。なんと住居の立地条件の違うこと！　しばし目の保養の時です。

翌朝、幼稚園に出かけるのに、同じ道を歩き、同じバス停に着くと、見覚えのある女性がバスを待っ

ています。「ここで生活をしている人の日常は同じサイクルで時を刻んでいるんだ」と、当たり前のことなのに、妙に感慨深くなってしまいます。さて、何番のバスに乗るのかは、すっかり忘れていました。でも、この女性とは前回同じバスに乗車していたので、「助かった彼女の乗るバスに乗ろう」と、彼女に注視のまなざしを向ける私です。

バスが到着、私のその視線を感じてか「Madam no」と、そのバスではないことを教えてくれます。感激です。「Thank You」と声をかけ、次に来たバスに一緒に乗り込みました。乗客一人一人に「Good Morning」と声をかけてくれるバスの運転手も同じ人です。「同じ」ということは、やすらぐものですね。街もここで生活している人も同じ日常性を送り、その中に舞い込んだ私は、飛び入り生活者なんだと思いながら、降りるバス停が来るのを窓を眺め注意していました。目印だったバス停の花壇の花はサルビアに代わっていました。紅葉の木々の中、季節感を感じながら幼稚園に出かけました。

再会　九月新学期の始まり

新しい先生たちとこどもが入っているのに落ち着いた雰囲気がします。四月と九月とでは違うのだろうか？　三歳児クラスだったS子、W男、K子、D男たちが心も体も大きくなっています。進級とはこんなにこどもを成長させるものなのか？　節目ということの意味を思います。四歳児クラスだったT子、スペシャリストに特別支援を受けているW男の明るくなっているのに驚く。T子も、にこっとして彼女独特の近づき方で寄ってきます。「だれかな？」「だれかな？」「だれかな？」と、やりとりを遊びながらしているうちに思いだしていくこどもの笑顔がかわいいです。

ハロウィーン　パーティー

十月三十一日は、ハロウィーン　パーティーです。それぞれのクラスでその日に身に付けるドレスを作っています。五歳児クラスになるとこどものこだわりがそのドレスやベルトの飾りの工夫に表れてきます。当日は、五歳児主催のお化け屋敷があり、どうしておどかすのかK先生と知恵を出し合っています。保育室の入り口には、おおきいカボチャに目・鼻・口をくり抜き中にろうそくを立てた「ジャックオーランタン」が飾られます。保育者は、みんな当日までの生活をどう組み立てていくか忙しく打ち合わせをしています。先生達は、自分が何に変装するのか、「自分のことは準備できてない」と嘆いていたのに……ところが、三十一日の朝、車から降りたのは、ライオン、カウボーイ、魔女、海賊、ロックンローラー、ジャック&ベティ、自由の女神、白雪姫とお妃様、トトロに観音様、と変装した先生やア

▲わたしはお姫様

シスタント。私と同年代のF先生はハイジに、秘書のYさんはハリーポッターのハリーに、H先生は、千と千尋の神隠しと、それはそれは目を見張るばかりの変装ぶりです。衣装だけでなく、ヘアースタイルからメイクまでの手の入れように、びっくりです。この日は、こどもおとなも変装してその気分で過ごすのです。お母さん達も思い思いの格好に身を包んできます。抱っこしている赤ちゃんまでもです。みんな忙しい中で、今年のハロウィーンは何に変装するか考え自分で衣装を作ったり買ってそろえたりと準備をするそうで、そのことが、楽しみであり習慣になっているようです。そこまで変装できるみんなに正直驚き感嘆してしまいました。H先生の「何になるか考えてください」のメールの意味が理解できました。

街の中も、それぞれの家庭の玄関にはジャックオーランタンを置き、庭やテラスに、お化けや吸血鬼

▲先生はかかしだよ !!

や棺などの怖いものを演出してデコレーションしてあります。十月三十一日の当日の夜は、子ども達は、扉をノックして「Trick or Treat」と声をかけ、その家の人からお菓子をもらって歩くのです。玄関先がハロウィーンに演出してある家庭ならどこの扉をノックしてもいいようです。真っ暗闇の中、変装したこどもが、ジャックオーランタンに灯された明かりを頼りにうろうろする。現実の生活の場が、その夜は一変して虚構の世界になってしまうのです。ある家庭の庭は、吸血鬼・骸骨・棺・墓石とぞっとする物と効果音で演出されています。虚構の世界と現実とが融合しゾクゾクワクワクしてきます。

アメリカ文化のなかに日本人がすっぽり入り込み楽しむ。初めて接したときのおとなの感覚はどうだったんだろうかな？　こどもはどんな気持ちで「Trick or Treat」と、三十一日に家を訪ねているのかな？　あまりに先生たちの前日の平静さからの変装ぶり（非日常性）にびっくり！　私が楽しませてもらいました。この地で生活しているみなさんと日本に住む私との感覚の違いが如実に表れ、不思議さの残る一日でした。

サンクスギビング　パーティー

ハロウィーンが済む頃には、落ち葉の季節になってきます。木の実も街路に落ちています。拾おうとすると、きれいなままの実がないのです。街の中でもすぐ近くに森があり、電線をリスが走るここＮＹ市郊外ウェストチェスターです。リスが食べているのです。木の実はそのまま落ちて拾えると思っていた私には驚きでした。休日の朝、ブーンブーンと大きな機械音がします。窓から眺めると、その音は、街路に落ちた木の葉を掃除機のような機械を背に、吹き飛ばして一カ所に集める仕事人の出すものでし

た。集めた木の葉の山をトラックで回収していくのです。大量の木の葉は、ほうきで掃くなんてできないようです。それでも、木の葉が舞い落ちる前に街路樹を剪定してしまうどこかの国よりずっと自然の様な気がします。

十一月二十七日のサンクスギビングが近づくと、ターキーの丸焼きの宣伝が新聞やテレビに登場してきます。紅葉した木の葉や収穫物で今度は玄関先がデコレーションされます。幼稚園にも家庭から野菜や果物が届きます。それをみんなで味わって収穫を喜び合います。当日は、ターキーが主菜で家庭独特の焼き方で料理し、家族が集まり食べることに感謝するのです。私は、Yさんの招待を受け朝からターキーを焼く手伝いをしながら一日その気分を味わわせてもらいました。

忙しい日常の中にあっても、行事ごとに簡単に演出しホームパーティーをその日は楽しんでいます。生活にメリハリがあるように感じます。デコレーションもどれ一つ同じ物がありません。家それぞれの主張があるように見えます。日本にも季節ごとの行事がありますが、どれだけ日本の伝統を大事にしているのでしょうか？　改めて考えさせられました。

（京都教育大学附属幼稚園）

手づくり活動の楽しさ すばらしさ(10)

浜本昌宏

お正月はおしゃれな箸袋を

心のこもった箸袋に、箸を添えて家族にプレゼント。食卓では、新春のよろこびと、こどもをめぐる明るい話題が弾むでしょう。

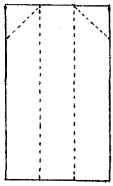
図Aは、季節の赤い南天の実を添え、自然の恵みやその彩りの美しさを生かしたものです。

図Bは、「年中」さんも容易に出来る箸袋です。色付の折り紙を図のように半分に折り、さらに折り曲げ、胴の部分に千代紙を細長く切って帯にし、貼り付けたものです。

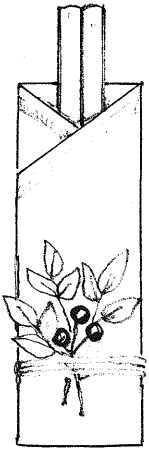
自分で工夫したデザインであればあるほどよろこばれ、成長を祝福されるでしょう。

図Cは、表裏の色や模様の違う折り紙でつくってみました。胴の帯は全体を引き締めるように貼り付けました。

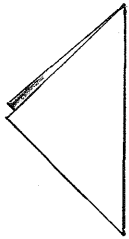
（元三重大学）

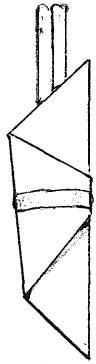


▲約15センチの細長い紙を上図の折線に添って折り、両端を重ね合わせます。胴には色付の紙ひも等を巻き、南天をはさみます。底は後ろに折り曲げます。

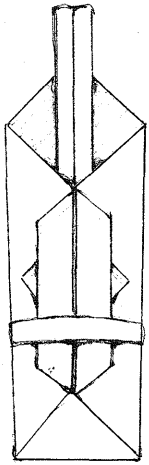


▲図A





▶図B



▲図C

その十一

嶺村法子

暮れから一月にかけて、どこの幼稚園でも、コマ回し、たこあげ、はねつきなどお正月の伝統的な遊びを用意していることと思います。私たちの幼稚園では、そのお正月遊びを家族や地域の方とも楽しめるよう、一月中旬に、〝わくわくランド〟と名付けたお正月遊び大会を実施しています。

各担任が、保育室、園庭、廊下、玄関に分れて、双六、カルタ、トランプ、坊主めくり、将棋、お手玉、けん玉、メンコ、コマ、竹馬、大縄、たこ作り、たこあげなど、自分のやりたいコーナーを受け持ち、子どもたちが自由に回って遊べる環境を用意します。

会議室には、〝わくわく茶屋〟なる休憩所も出現します。教頭と主事が中心になり、十二月の餅つきでついたおもちを、おしるこにしてふるまいます。ホットプレートでこんがり焼いたおもちのいい匂いが園内に漂い、遊びの合間にほっと一息つきに来る親子で賑わいます。

たこ作りやコマ回しのコーナーでは、「昔取った杵柄」を披露するおじいちゃんの姿があり、園庭では、ご夫婦ではねつきを楽しんでいる姿もあります。誰もが童心に返ってゆったりと遊べる一日を用意することが、遊びの伝承や子育ての楽しさにつながればと思います。

三学期の始まりに
山くずしと坊主めくりと
双六作りのコーナーを用意した

幼い日

TO・NI・KARA ひろば

▲親子コマ対決 !!　ギャラリーに囲まれちょっと緊張……

従兄弟たちと飽きずに遊んだ山くずし
指先に全神経を集中させ
小さな音も聞き逃すまいと聞き耳を立て
慎重に慎重に駒を運ぶ
その緊張感が
カチッ
という音と共に笑い声に変わる
山くずしの楽しさを
子どもたちはすぐに受け入れた

坊主めくりのコーナーでは
ござの上に百人一首の絵札を並べた
三つの山から一枚めくり
坊主が出たら全部もらう
姫が出たら全部手放す
それだけのルールのこの遊びに
みんなすっかり虜になった

TO・NI・KARA ひろば

ござの上の絵札が多くなるにつれ
一枚めくるときの緊張感が増してきて
いつも勝ち気なはっちゃんまでが
「誰か代わりにめくって」
などと言う始末
私もその緊張感に耐えられず
坊主が出るたび大声になる
そしてありちゃんに
「先生、ワーとかキャーとか言わないで」
と叱られる

そのうち子どもたちは
坊主を引いた友達に
「あけまして、おめでとうございます」
と声をかけ始めた
札をあけたら大当たり！
坊主を引いておめでとう！
その心境をなんと的確に表現していることか

これでもう坊主を引いてもこわくない
緊張感を笑いに変えるたくましさで
子どもたちは
坊主めくりを自分たちの遊びにしていった

〝わくわくランド〟の坊主めくりコーナーは
お父さん、お母さんを巻き込んで
ひときわにぎやかな笑い声に満ちていた

もうひとつ
〝わくわくランド〟で人気だったのは
なかなか上がれない《うみぐみすごろく》
縄跳び十回とか
ジャングルジムまで行って来るとか
豚の真似をするとか
様々な難関を突破して
「あと少しで上がり！」というところで
〈すたーとにもどる〉

TO・NI・KARA ひろば

▲キャー!! 〈すたーとにもどる〉だあっ！

という非情な一コマが…

「先生、この双六、上がれないんですけど」

とぼやきながら

最後まで付き合ってくださったお母さん

子どもたちは

自分たちが作った双六で

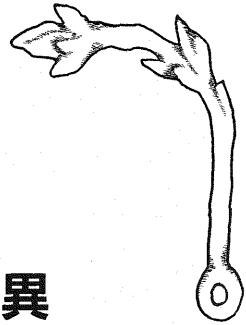
大人と対等に渡り合えたことに大満足

こんなにゆったりと双六で遊べるのも

〝わくわくランド〟ならではのことでしょう

幼稚園で大好きな人と一緒に心ゆくまで遊んだ経験が家庭での遊びを豊かにし、さらに伝承遊びの楽しさが次の世代へと引き継がれていくきっかけになればと思う。幼稚園の果たす役割の大きさを自覚し、子どもも大人も一緒に楽しめるひとときを作っていきたい。

（中央区立月島第一幼稚園）



こどもの本から

異文化をつなぐ子どもたち

大沢　啓子

たくさんある絵本の中からこの『いっしょがいちばん』を手にとったのは、まず表紙にひかれたからである。どくろの旗印の小舟には、ぶたととりが座り、舟に引かれた浮輪には泳ぎは得意のはずのさかながしがみついている。これからどんな冒険が始まるのか、どんなおもしろい話が展開するのか……、漠然とそんな思いでページを開いた。ところがいつまでたっても冒険は始まらず、ついに海賊船も宝の山も何もないままこの話は終わってしまったのだ。「なに、これ！」。しかし、あてがはずれた思いとは別に、何かほわっとした暖かい感じが心の中に残った。何とも可愛く描かれた三匹の仲良しぶりだ。

さかなのハラルドは、自分の住んでいる沼にさかなの子どもがいないのが少々不満。一緒に遊べる友だちが欲しいのだ。「ともだちといっしょなら、もっとおもしろいよ、ずっとたのしいよ」と父さんと母さんを困らせている。農場に住むこぶたのインゲもパパやママや農場の大人たちに遊んでもらうだけではもの足りない。「わたし、ほかの子とあそびたいの」。ことりのフィリップも同じで、「ぼく、ブタみたいにどろんこのなかでころげまわったり、さかなみたいに沼でおよいだりしたいんだ」と、わからずやを言っている。

どうやらハラルドもインゲもフィリップも、兄弟はもちろん友だちもいないようだ。やさしい両親や大人たちに囲まれ、愛情深く育てられてはいるものの、やはり子どもと一緒に遊びたい。友だちがいたらどんなに楽しいだろうと思い描いていたのだ。

そんな三匹が沼の岸で引かれるように出会った。

さかなのハラルドは泳げて少し飛べるけれど、歩けない。ぶたのインゲは歩けて少し泳げるけれど、飛べないし、ことりのフィリップは飛べて少し歩けるけれど、泳ぐことはできない。それぞれ得意なこと、少しだけできること、全くできないことがバラ

◀『いっしょがいちばん』
フリードリヒ・カール・ヴェヒター作・絵
吉原高志訳　徳間書店　二〇〇一年

バラの三匹が、お互いに教え合いながら、手伝いながら一緒に練習していると、だんだん同じことができるようになってきた。一緒に水の中を泳いだり、野原を歩いたり、空まで飛べるようになってきたのだ。しかも三匹とも遊びながら、おなかやおしりやはなをぺったんことくっつけ合ってとても楽しそう。

三匹の父さんと母さんは、子どもたちが元気に明るくなったのを見て、「おかしな、かわった、へんてこなともだちのおかげかな?」と驚いたりよろこんだりと、子どもたちの友情を歓迎しているところでこの話は終わっている。

なんと可愛い、そしてなんと奇想天外な話なのだろう。この三匹の子どもたち、水のなかのさかなと陸のこぶたと空のことり、それぞれ住む世界が違うのに気持ちが通じている。さかなはさかなの友を、ことりはことりの友を見つけたのではなく、水、陸、空と全く違う世界の友だちと出会い、仲良くなったのだ。本来、さかなととりとぶたが同じ空間で遊ぶなんてことはあり得ないことなのだが、この絵本はなんの疑いもなく三匹が一緒に遊ぶ。さかなが道を歩くなんて、ぶたが空を飛ぶなんて、何と奇抜で楽しい展開なのだろう。三匹は擬人化された動物とはいえ、水、陸、空の住人の代表として描かれているのに、ぶたやさかなが空を飛ぶという発想は読者の想像を心地よく裏切ってくれる。そして、三匹が水辺ではなやおなかをくっつけて遊ぶ場面は何ともいえずユーモラスで可愛い。からだをくっつけ合うだけでもう楽しくてしかたがないという興奮ぶりにも、ヘンな遊び方、でもおかしいね、と笑ってしまう。こんなところに作者フリードリッヒ・ヴェヒターのユーモアと発想のおもしろさがあるのだろう。この本は一九七三年にドイツで出版され、以来

読みつがれていることであるが、三十年経った現在も少しも古さを感じさせないのは、こんなおもしろさにひかれるからにちがいない。

それぞれが同種の仲間と遊んでいる場面は、楽しそうではあるが人数が増えれば遊びの規模が大きくなるだけで遊びの発想は変わらない。しかし三匹がそろって遊び、お互いに相手の遊びをしようとすることで、自分のカラをつきぬけ新しい世界を獲得する。ことりは水のなかを泳ぎ、さかなは野原を歩き、ぶたは空を飛ぶ。この場面は生き生きと描かれ、最後は三匹そろって空のかなたへ飛んでいってしまう。そこには無限の想像の世界が広がっていく。三匹はどこまで飛んでいくのだろう……？

この絵本にはおまけが付いていて、最後に五ページにわたって遊びに使うアイテムが描かれている。どくろの旗印にうきぶくろ、インディアンのはねかざりやカウボーイの帽子、等々。これを切り抜けばそのまま遊びに使えるわけだ。ここでようやく表紙の意味が分かり、現実にひきもどされた。表紙の冒険はこれから始まる。ここからの話の主人公は読者である子どもたちであり、いろんな小道具を作って、自分たちの遊びを思いっきり楽しくする。わくわくするような冒険ごっこは自分たちで作っていくのだ。友だちとみんなで頭を寄せ合って、何をしようか、どこに行こうか、相談しながら決めていく。たとえ一人ではできなくても、みんなで気持ちを合わせれば楽しさは倍増、どんなことでもできてしまう世界なのだ。遊びとなれば子どもたちは得意、なったつもりで遊ぶのも大得意だ。その気になればさかなが道を歩いたりぶたが空を飛ぶのは朝飯前なのかもしれない。

仲良しの友だちと暖かく見守ってくれる大人たち。準備はＯＫ。さあ、海賊船の出帆だ。

（舞々同人）

編集後記

明けましておめでとうございます。今年は、表紙絵を藤原ヒロコ先生に、カットを彌永たたえ先生にお願いいたしました。

＊

子どもの頃のお正月の遊びというと真っ先に浮かぶのは凧揚げです。最初、凧を大人に支えてもらい糸を持って走ります。少し上がったところで止まり繰り出します。風を受けてぐんぐん揚がっていく凧。今でもひっぱられる感覚が腕に残っています。吉村先生が理系の遊びと書いておられましたが、凧揚げと新たに出会えたように感じています。私が育った所には特有のトンビ凧があり、今も同じ形のものがわが家の納戸に置いてあります。久し振りにこの凧を揚げてみたくなりました。

「幼児の教育」の読者暦は二十三年。学生、幼稚園教諭、母親と立場は変わりながら、子どもたちの幸せを考えてきました。今回思いがけず編集に携わることになりました。よろしくお願いいたします。（河合）

＊

新しい年の始まりとともに、編集部に河合聡子さんを迎えました。河合さんは小学生と中学生の二児の母親で、これまで地元の小学校のT・T、中学校のPTAなどの活動をしてきました。これらの母親としての体験が、今後の編集活動にも生かされることと思います。今年も「幼児の教育」をどうぞよろしくお願いいたします。（仲）

幼児の教育

第一〇三巻 第一号（二〇〇四年一月号）

定価五五〇円（本体五二四円）

発行 平成十六年一月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会
〒112—8610 東京都文京区大塚二—一—一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

発売所 株式会社 フレーベル館
〒108—8620 東京都港区三田五—一二—一
〒113—8611 東京都文京区本駒込六—一—一四—九
☎〇三—五三九五—六六一三（営業）
☎〇三—五三九五—六六〇四（編集）
振替 〇〇一九〇—二—一九六四〇

☆ 本誌ご購読のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

21世紀保育ブックス

これからの保育はどの方向へと向かっていくのか。新しい21世紀の保育を展望しながら必要とされる諸問題を根本的に掘り起こし、確実に保育者を導き育て、将来の保育への指針を与えるシリーズ！

編集委員　森上史朗（子どもと保育総合研究所代表）
柴崎正行（大妻女子大学教授）
柏女霊峰（淑徳大学教授）

最新刊

21世紀保育ブックス⑭

「わたしの世界」から「わたしたちの世界」へ
葛藤を通した子どもたちの育ち

今井和子・神長美津子　共著

今、家庭で「子どもの発達に見合った子育て」がなされることが緊急の課題であり、なかでもとりわけ子どもたちの「心を育てる」ことが必要とされています。人間としての「核」が形成される乳幼児期の子どもの内面の育ちを、豊富な事例をもとに探ります。

B6判　216頁　定価：本体1,200円＋税

21世紀保育ブックス⑮

21世紀の子育て支援・家庭支援
子育てを支える保育をめざして

伊志嶺美津子・新澤誠治　共著

保育者には、子どもを保育するだけではなく、親を支えて子どもの発達を保障し、家庭を支援していく力量が必要になってきました。本書では、カナダの事例や動き出した子ども家庭支援センターの取り組みを紹介。これからの子育て支援、家庭支援について考えます。

B6判　188頁　定価：本体1,200円＋税

既刊本

①新しい教育要領・保育指針のすべて　森上史朗　著
②新時代の保育サービス　柏女霊峰・山本真美　共著
③カウンセリングマインドの探究　柴崎正行・田代和美　共著
④子ども虐待の理解と対応　庄司順一　著
⑤知的好奇心を育てる保育　無藤　隆　著
⑥保育者の「出番」を考える　吉村真理子　著
⑦地方自治体の保育への取り組み　山本真美・尾木まり　共著
⑧乳幼児期の「心の教育」を考える　阿部和子　著
⑨自由保育とは何か　立川多恵子・上垣内伸子・浜口順子　共著
⑩保育者が出会う発達問題　大場幸夫・前原　寛　共著
⑪保護者の要望をどう受けとめるか　小笠原文孝　著
⑫保育所と幼稚園～統合の試みを探る　吉田正幸　著
⑬子どもの健康を考える　巻野悟郎　著

〈以下続刊〉

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部（03）5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育　第一〇三巻　第一号　平成十六年一月一日（毎月一回発行）昭和二十三年四月十五日第三種郵便物認可

行事別保育のアイデアシリーズ

日々の保育にうるおいと心地よい緊張感を与えてくれる
「園行事」のアイデアを豊富に紹介する新実技シリーズ

最新刊

行事別保育のアイデアシリーズ④
みんなでつくろう 発表会

花輪　充　著

日常の保育を発表会へと発展させていくためのユニークな脚本集。簡単なリズム遊びからミュージカルやオペレッタまで、子どもたちがふだんの遊びの延長で取り組むことができ、発表会が魅力いっぱいのものになりますます。「発表会まで」と「発表会では」のアドバイスと楽譜を多数収録。

AB判　96頁　定価：本体2,200円＋税

行事別保育のアイデアシリーズ⑤
みんなわくわく クリスマス・お正月

島本一男　著

子どもが楽しみにしている行事、クリスマスとお正月をどのようにして保育の中に生かしていったらよいのか。本書は、子どもと一緒につくる製作物のアイデアやパーティーでのゲーム・出し物のアイデア、遊び歌などの事例を多数紹介しています。新しいクリスマス、お正月のヒント集です。

AB判　96頁　定価：本体2,200円＋税

［既刊］好評発売中！

行事別保育のアイデアシリーズ①
元気がいっぱい夏期保育

やまもとかつひこ監修／
関西あそび工房著
AB判　96頁
定価：本体2,200円＋税

行事別保育のアイデアシリーズ②
みんなにこにこ運動会

ワークショップりんごの木著
AB判　96頁
定価：本体2,200円＋税

行事別保育のアイデアシリーズ③
心を伝える入園式・卒園式

小林紀子編著
AB判　96頁
定価：本体2,200円＋税

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部（03）5395-6608にお問い合わせください。

定価　五五〇円（本体五二四円）☆